

IMPRESSION

# “Best grip tire I’ve ever used”

by Shinobu Noguchi

AW2 タイヤインプレッション  
by野口忍

4月28日、トレックワールドでおなじみの京都国際会議場をスタートする、ラファ・ジェントルマンレースに参戦してきた。ジェントルマンレースとは、一言で言えば、一般的なセンチュリーライドのコースをより過酷にし、個人ではなく5人一組のチームでゴールを目指すイベント。今回のコースは京都北部のオフロードの林道を含む山を6つ越え、獲得標高は2800mに及ぶ。レースだが、決して速さや順位を競うわけではなく、「ロードライディング」が本来持つ冒険的要素『エピック』をキーワードに、苦しみやその先にある喜びを感じてもらいたいという主催者の思いがある。

もともとは、アメリカのラファのスタッフによって2008年に創始され、これまでアメリカはもちろん、イギリス、オーストラリアなどでも数多くの大会が開催されている。「ジェントルマン」というタイトルは、仲間をいかに気遣い、紳士たることができるかなど、その由来は多岐に渡る。

ルールは、基本的にロードバイク、またはシクロクロスバイクの使用のみが許され、トラブル時はすべて自分たちで対処しなければいけないという完全自己責任。5人一組でスタートし、途中に設定されたチェックポイントを全員で通過し、また全員でゴールしなければならない。

速く走るためのバイク「マドン」「ドマーネ」を扱うメーカーであるトレックチームは、主催者の思いとは裏腹に最速タイムを出すべくレースに臨んだ。結果的にほぼトラブルもなく、総距離150キロを約6時間でゴールし総合優勝したのだが、このイベントではメンバー全員が新しくリリース予定の「AW2 Hard Case Lite 25C」で挑んだ。



トレックチーム。左からディビッド・ジョンソン、野口、東島信行、森崎芳宏、田辺修一

というのも、ジェントルマンレースのコースには2か所完全オフロードの林道が含まれるからだ。かつて自分が選手だったころ、よくクロスカントリーのトレーニングとして使っていた林道でもあり、そこをロードバイクで走行することの厳しさは誰よりも良く知っている。レース前10日間ほど、このAW2をテストで使用したのだが、一番最初の印象は「なんてグリップ力が高いタイヤなんだ」ということ。雨の中での走行テストもしたが、その安心感は抜きんでている。これは全く大袈裟でもなく、本当にこれまで使用してきたロードタイヤの中で最もグリップ力に長けたタイヤであると感じた。



コースに含まれる林道。数日前の雨で水たまり箇所が多数



完全にマウンテンバイクで走れるような林道を10キロほど走行

話をレースに戻すが、このイベントを最速で完走するためには、まずトラブルを起こさないことが最も重要であり、その最たるトラブルとは、もちろんパンクだ。このタイヤのもう一つの強みは、耐パンク性の高さ。これはタイヤのトレッドを触って分かるが、明らかにタイヤセンター部の厚みが通常の軽量タイヤとは全く異なる。これは、トレッド内側に刺さりパンクに対応する補強材が採用されているからだ。オフロード走行ということで、自分はドマーネに25Cを選択。チューブは少しでも乗り心地を良くするために、XXX Latex Roadチューブを選択。空気圧は指定値のミニマムである90PSIに設定。オンロードでのグリップ力によるコーナリングでの性能の高さは抜群で、耐パンク性も高いが決して走りが重すぎる感はない。25Cで実測280gとR2よりも50gほど重い。実走はそれを感じさせない。ただ、登りなどでの加速感が若干鈍ってしまうことは否めない。

結局、上記の写真のような林道をトータル20キロほど走行したのだが、5人のうち、オフロード走行の経験のなかった田辺が一度パンクしてしまったが、それ以外は全員トラブルゼロ。

オールウェザータイヤと聞くと、一見走りの性能というよりも耐パンク性に長けたタイヤという印象をもたれるかも知れない。しかし、このタイヤの最大の特徴は、サイクリストが求める要素である、グリップ力、耐パンク性、エアロ効果、天候・路面を選ばないこと、低い転がり抵抗、十分な軽量性を持ち合わせた究極のオールラウンドロードタイヤと言える。

日頃のトレーニングライドから、センチュリーライドやブルベ、通勤などその用途は多岐にわたる。サーキットレースやヒルクライムに特化したようなイベントなら、もう少し軽量のタイヤやチューブラータイヤに分があるが、ほとんどの方が普通に河川敷や峠でロードバイクライドを楽しむと考えるとそのターゲットとなる客層はかなり広がっていくと考えられる。

ロードバイクの楽しみはやはり風切るスピード感にあるが、いかに安心して自信を持って下ったり曲がったり出来るかどうかでその楽しみの幅が大きく変わってくると思う。そういう視点でも是非、下りが苦手、パンク修理も苦手な初心者のサイクリストにおススメいただきたいと思う。



## Impression Rider

インプレッションライダー

### 野口 忍

トレック・ジャパン株式会社  
マーケティング担当

2000・2002・2003年MTB・XCアジアチャンピオン  
2004 MTB・XC全日本チャンピオン  
2008～現職